



三村悠莉さん

Yuri Mimura

Profile

みむら ゆり (18歳・那賀川町出身・東京都在住)

4歳からジャズダンスを習い始め、小学3年生に阿南市民劇団「夢創」に入団。通算で7年間に在籍し、7作品に出演。「夢つむぎの詩2006」、「夢見竹のかくれんぼ」で主役を務める。尊敬する人はミュージカル俳優の市村正親さん。好きな言葉は情熱(=パッション)。「パッションは受難という意味を併せ持つことから、つらいことでも乗り越えていく情熱を持ちたい」という市村さんの言葉に共感を抱く。夢は劇団四季に入ること。

ミュージカルの舞台が私の居場所

「稽古(けいこ)はつらいけれど、本番が終わった時の達成感が好き」

阿南市民劇団「夢創」の中心的役者の一人として活躍してきた三村悠莉さんが、プロのミュージカル俳優をめざして、恩師の鎌田真由美さん(東京都在住)のもとで新たな人生をスタートさせた。「夢創」の卒業生としては初めての挑戦だ。

将来の夢は、劇団四季に入ること。「多くの人に感動を与えられる俳優になりたい」と意気込んでいる。

ジャズダンスを習っていた小学3年生の時、母の勧めでミュージカルを始めた。「最初は気が進まなかったけれど、

友達ができ、格好いいと言われるようになって、やりがいを感じました。」とはかむ。次第にのめり込んだ。

ジャズダンスで養われたリズム感と舞台度胸で入団以来、7作品に出演。昨年10月に上演された「夢見竹のかくれんぼ」では、主役として迫真の演技で観客を魅了した。「舞台上立つと、自然とスイッチが入るんです」。ほとぼしる情熱を舞台にぶつける三村さんだが、普段は感情を大きく出すことはない。舞台上立つ彼女を見た先生や友人は、「まるで別人のよう」と口をそろえる。「ミュージカルのおかげで、少しずつ自分を出せるようになりました」。

思い出の作品は「夢つむぎの詩」。上演された3回のうち2回に出演し、「浜辺の唄」をソロで歌う子役や転校生役を演じた。高校受験を機に、3年余り夢創の活動から離れていたため、3回目の気仙沼復興支援合同ミュージカルは客席から舞台を支えた。「入団して以来、『夢創』の舞台を客席から見るのは初めてでした」。震災の悲しみを乗り越え、前向きに生きていこうとする子どもたちの姿に心を熱くした三村さん。「見るよりも舞台上に立ちたい」。舞台から離れてみて、初めて自分の素直な気持ちに気づいたんです。忘れかけていた熱い思いが込み上げてきた。

高校3年の夏、大学か、専門学校か、鎌田さんのもとか、選択を迫られたが、「いつも親身になって私たちのことを考えてくれる鎌田さんのような人になりたい」と、恩師のもとを選んだ。例えば、鎌田さんが「夢創」の振り付け師として着任したのと時を同じくして入団。ふとした偶然で交わった二人の人生。不思議な縁を感じずにはいられなかった。劇団四季の名作「コーラスライン」の舞台に立っていたあこがれの人のもとで指導を受ける。想像しただけで背筋が伸びる思いがした。

秋公演終了後、思い切って自分の気持ちや伝えた。「ちゃんと面倒をみてあげるから…」と、恩師は笑って抱きしめてくれた。あふれ出た涙は、

これから厳しい環境に身を置くことへのささやかな覚悟だった。「すべて基本からやり直す。自分に足りないものをいかに手に入れられるか。あきらめないことを才能とするなら、持ち前のガッツで開花させてほしい」。鎌田さんからは主に演技指導を受ける。週5日3時間の濃密な稽古に加え、発声、滑舌、歌、役づくりは別メニュー。「授業料は自分で稼げ」が鎌田さんの教え。自分、稽古とバイトづけの日々が続く。掃除、洗濯、自炊、慣れない都会生活を前に「だんだん億劫(おっくう)になってきました。」と苦笑する。

東京には「夢創」の思い出の品々も持って行く。実は、三村さんは、自分が出演した作品のビデオをあえて見ようとしなかった。「自分の下手な演技をわざわざ振り返るなんて、と斜に構えていました。でも、今は違う。自分に足りないところを研究しなければと思っています。プロの世界では個性がある役者が好まれます。控えめな性格だけに、相当頑張らないといけないかも」。

3月1日、思い出多き学び舎を後にした。新たな人生のスタートを祝福するかのごとく、春番が背中を押す。「頑張ろう、また見に行くけん」。友人の励ましが心にすっとしみ込んだ。「夢創」で芽生えた「夢」を紡ぎ、そして叶えようとする18歳が、花の都で挑戦の春を迎える。